

ルポ●全入時代の「学力欠落学生」対策 最高学府をバカだらけにしないために

石渡嶺司 / 大学ジャーナリスト

基礎学力の低下が著しい今時の大学生。生き残りをかけて差別化を図る各大学は、この難問にどう取り組んでいるのか。話題の「最高学府はバカだらけ」の著者が、最新の大学事情に迫る

V字回復した大学はどこが違うか

「クリスマスマスのリース作りしてみませんか？ 簡単にできますよお〜」

こんなかけ声が飛び交うのはカルチヤースクールではない。恵泉学園大学（東京都多摩市）のオープンキャンパス（大学説明会）会場の一角でのこ

ス参加者は親子連れ一組だけ。残りはずでに推薦入試に合格しているものの、「本当にこの大学でいいか不安になって考え直そう」と思って参加した。

つまり、大学としての本来の「お客」はわずか二人、いや受験生ということでは一人のために手間ひまを費用をかけて開催したことになる。

その点、この恵泉学園大は小規模でかつ女子大。立地も都心にあるわけではなく共学校よりも悪条件の中、来場者一七〇人は大健闘と言える。

オープンキャンパスでは木村利人学長も自ら駆け回っていた。受験生には「よく来てくれました」と声をかけ、保護者には名刺を渡すほどの力の入れようだ。

木村学長の鞆の中には常に大学パンフレットが入っている。もし話題になればすぐ手渡すためだ。

「学長は大学のスポーツスマンであり広報マンです。本学の素晴らしさを知ってもらうためにはパンフレットを持

とだ。

その一時間前、来場者は大学の概要説明ではなく、聖歌隊の清らかな合唱に聞き入っていた。

恵泉学園大学は一九二九年設置の恵泉学園普通部を起源とする、キリスト教を基盤とした大学である。そのため、概要説明も他大学のようにホールや大講義室ではなく、チャペルにて開かれる。

私が見学した二〇〇七年十二月のオープンキャンパスは「クリスマス&一般入試スペシャル」と題する「スペシャル版」。

ち歩くことなど当然です」

と木村学長は話す。

同大は二〇〇一年度入試で定員割れを起こしている。そのときの受験者数は一〇六三人。定員四六二人のところ入学者は三九九人とどまった。

一度、定員割れを起こすとそこから立ち上がれないまま「負け組」に転落する大学が多い。恵泉学園大はV字復活を成し遂げた、数少ない例外である。



恵泉学園大学のオープンキャンパスの風景。写真の左、受験生や保護者に話しかけている男性が同大の木村学長

クリスマスに近いこともあって、聖歌隊の合唱にクリスマスリース作り、さらにはケーキバイキングもあった。当日参加した高校生・保護者は一七〇人。

オープンキャンパスで十二月と言えば、すでに推薦入試シーズンが終了し、一般入試志願者は志望大学の選択を終えた、いわば端境期。私が数年前に神奈川のある単科大学A大学のオープンキャンパスを取材したとき、参加者は三〇人に満たなかった。そのうち二〇人は最初の概要説明終了と同時に退場一〇人のうち純粋なオープンキャンパ

る。

二〇〇七年度入試の志願者総数は三九二八人。同大のホームページにはその詳細が全て公開されている。

「データはできる限り公表すべきと考えています」

と話すのは宇田川篤・入試広報室長。定員割れした直後に赴任、立て直しを図る。

それまで形式的だった高校訪問にマニュアルを作り、割り振る高校も戦略的に考えるようになった。さらに入試制度改革に着手、今では関東の有力私大では珍しくない「同一日程併願制度」を二〇〇三年度入試から実施した。

その後も入学検定料割引制度、試験当日出願制度などを導入する。

「我々はこの数年間、毎年入試制度改革として新しい仕掛けを出してきました」

もちろん、入試改革だけで志願者数がV字回復したわけではない。同大は

元から「聖書」「園芸」「国際」を教育理念とし、一年次には園芸栽培実習が必修となり、海外体験学習にも力を入れている。そのため、二〇〇六年、二〇〇七年と二年連続で文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)を獲得したほどだ。

二〇〇六年秋にはビジネス雑誌『ブレジデント』で「お買い得度1位」(入学偏差値と就職実績を比較した際の差の大きさ)とされ、保護者から注目されていることも大きい。

もちろん、事情を知らない方はこう思われるかも知れない。「リース作り体験にキーキバイキング? 学問とは関係ないじゃないか。そこまで受験生にサービスしなければならぬのか」

しかし、大学関係者はリース作り体験やキーキバイキングで受験生が集まるなら安いもの、と考えるに違いない。何しろ、恵泉女学園大と同じようにしても、いや、恵泉女学園大以上にサービス内容を手厚くしても受験生が集ま

るとは限らないからだ。

過当競争で相次ぐ定員割れ

二〇〇七年十二月現在、日本には七五六校もの大学がある。うち私立大学は五八〇校。しかし、日本私立学校振興・共済事業団の調査によると、定員割れを起こした私立大学は二二一校、三九・五%にもほぼる。一九九七年には定員割れは二三校、全体の五・四%だったことを考えると最悪の状況にあると言ってもいいだろう。

二〇〇七年に新たに「定員割れクラブ」に入ったのは恵泉女学園大の近隣にある多摩大学(東京都多摩市)だ。

一九八九年に開学、情報教育や民間企業出身教員の実学講義、日本語を禁止する「イングリッシュ・シャワー」などで話題を集め、一時は入試倍率が三三倍を超えたこともあった。

しかし、二〇〇七年はグローバルスタディーズ学部を新設したにもかかわらず、経営情報学部が定員三二〇人に

対して二七三人、グローバルスタディーズ学部が定員一五〇人に対して八五人と、ともに定員割れを起こしてしまう。「これまでは他大学のように推薦・AO入試で六〇〜七〇%を入学させることはしていなかった。ここまで青田買いが激化するとうちのような小規模な大学は勝てません。やむを得ず今年度は他大学と同じように推薦・AO入試の枠を増やす方向で考えています」

と、矢内彰・アドミツションセンター統括部長は話す。

同大を知る高校教員は学生を甘やかさない点を高く評価している。問題は認知度の低さだ。認知度を少しでも上げるため、二〇〇七年一年間に矢内部長ほか職員は東日本を中心に高校を六〇〇校も訪問した。

しかし、矢内部長は次のようにも話す。

「無試験に近い推薦・AO入試の枠を増やすの言うなれば消耗戦のようなもの。大学はそれぞれの特徴を明確に

世間に示すべきだし、本学でも新しい機軸を出さなければならない。しかし、今は目先の定員確保でもがいている状態なのです。大学広告が目立つようになりまし。本来は研究や教育で学生に還元すべきお金です。広告宣伝の消耗戦に対して大学間でなぜ議論をしないのか疑問です」

AO入試は「人間性を重視」「意欲を大切にす」云々と言われるが、要するに推薦入試の変化球に過ぎない。

それでいて、文部科学省の「推薦入試の入学者は五割以内」という制約を受けない。そのため、推薦入試と全く同じであるのにAO入試と言いつ張る大学が続出している。ある私大の教員は「推薦・AO入試の枠を増やしたと高校側が足元を見るようになる。でも一度手を出したらやめるわけにはいかない」

まさに消耗戦だ。今まで順調に受験生を集めていたのに大学の不祥事で一変したのは北海道

の北翔大学(北海道江別市)。

一九九七年開学の北海道女子大学を前身とし、二〇〇〇年には男女共学化に合わせて校名を北海道浅井学園大学と改称した。福祉や教員養成に強みがあることもあり、受験生を順調に集めていた。

しかし、二〇〇五年十一月十三日、『読売新聞』の一面に大学の名前が出ることで状況は暗転する。その日の一面には浅井幹夫理事長(当時)の補助金流用疑惑が掲載されていた。その後、私的流用が発覚、浅井氏は理事長を辞任、二〇〇六年に逮捕される。

大学は外部から理事長・学長を迎え、文部科学省に補助金を返還する。さらに二〇〇七年には校名を北翔大学に改称し、出直しを図った。

二〇〇五年には北海道浅井学園大学から浅井学園大学に改称しているため、一〇年間で実に三回目の校名変更となる。

しかし、二〇〇七年は定員五四〇人

のところ新入生は四一四人にとどまり、初の定員割れとなった。

『読売新聞』が事件を報道した日は実は推薦入試の直前でした。すでに願書は締め切っていました。それでも合格発表後には保護者から「大丈夫か?」と電話がかかってきました」

と大関慎・入学支援部長は説明する。それでも二〇〇六年は定員割れこそしなかったものの、悪いイメージから特に保護者に敬遠された。

教員が高校訪問をしても「生徒は行きたいようだけど、親がねえ……」と言われる。それまでオープンキャンパスには延べ一五〇〇人以上が参加していたのに、二〇〇六年は一〇五一人まで減少、そのまま受験者数にも反映し翌年の定員割れにつながる。

そこで二〇〇七年七月のオープンキャンパスでは学生会館の宿泊を無料にし、さらに函館・旭川・帯広の三都市からの参加者のため無料送迎バスを出した。回数も増やし、十二月にも実施